

Myths on Creation of the Universe and Impersonal Child Descended from Aquatic Animals in Oceania, Ryukyu and Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崎山, 理 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004227

オセアニア・琉球・日本の国生み神話と不完全な子

——アマンの起源——

崎 山 理*

Myths on Creation of the Universe and Impersonal Child Descended from Aquatic Animals in Oceania, Ryukyu and Japan

Osamu SAKIYAMA

The purpose of this paper is to compare the origin folklore of the unnatural mankind of Oceania with that of Ryukyu and Japan, and point out the latter's Oceanic origin, not only through the motif itself, but from a linguistic point of view based on an Austronesian key word.

The motif of "a human born from aquatic animals" is observed widely in these areas. Considering these tales, when sibling marriage occurred and gave birth to an unnatural child, such an impersonal being is described metaphorically by changing it into small aquatic animals, such as clam-shell or worms in Oceania generally, *hiru-ko* "leechlike child" in Japan (myths of the *Nara* period), and *amang* "hermit crab" in Ryukyu (myths of Yaeyama Is.). These tales evidently show the Oceanic origin which spread northwards to Ryukyu and Japan.

For Ryukyuan word *amang*, the author claims that this word originates in Proto-Austronesian **(k)umang* "hermit crab," arguing that this Austronesian word split into doublets such as **[q]emang* and **[q]uma* (**umwa*) in West Micronesia, the latter being inherited mainly in the Nuclear Micronesian languages. But the former found in Palauan and Yapese, reached Ryukyu supposedly after the *Kofun* (Old Mound) period in the 4th century of Japan, and became *amang* in Ryukyuan dialects generally, or in some dialects *amam-aa* (derived from Proto-Ryukyuan **[q]amang-aa* with a Ryukyuan diminutive suffix) or *amam-u*

* 国立民族学博物館第5研究部

Key Words : Austronesian, oral tradition, Creation of the Universe, sibling marriage, hermit crab

キーワード : オーストロネシア語族, 口頭伝承, 創世神話, 兄妹始祖, ヤドカリ

and *amam-i* with supporting vowels, but its grammatical functions are unknown.

It seems likely that Austronesian factors participated in the formation of the Japanese culture and language. The example that the author presents here relates also to one of these cultural items.

はじめに	Ⅲ. アマンの語源
I. 神話の不完全な子	おわりに
II. 島生みの並行性	

はじめに

比較言語学は、諸言語の比較によって語彙の祖語形を再構成するという手続きの過程で、個々の語彙の語源を明らかにする作業も、必然的にその研究対象としてかかわってくる。しかし、日本語のような言語系統について多くの議論がある言語の場合、たんなる音と意味との類似による比較や、あるいは、意味変化を恣意的に推定することによって行われる比較だけでは、その語源説は説得力を欠いたままになる。

たとえば、上代日本語 *tuki*~*tuku*-「月」の語源を原オーストロ・タイ語の **bi(n)-tuqan* 「星」に求める説がある [BENEDICT 1990: 248]。しかし、音韻的側面からだけの変化を根拠にしたこの説は、すくなくともこの祖語形を維持する民族集団において、たとえば、星が集まって月となったとか月が割れて星となったというような民話、伝説がないかぎり、このような意味変化を容認するのは困難だといわざるを得ない。

筆者は、すでに、オーストロネシア語族に見出される、南十字星を魚のエイにみたて、米粒を砂にみたてる比喻（その起源はことば遊びのひとつの形式に由来する）によって琉球語、日本語のハイ（ハエ、ハヤト）、ヨネ（ヨナ）の起源を説明した [崎山 1990]。

ここにおいて、語源研究における、意味変化への傍証となし得るような口頭伝承による裏付けがあるかないかによって、問題の語源 (etymology の語源は *etymon* 「真であること」の学) にたいする信憑性が変わってくる。

よりするに、一見精密さを競いあう音韻対応だけに頼った言語比較から導かれる言語系統論や語源論にも、おのずと限界があることになる。

本論においては、創世神話の人間の創造において出現した人間として不完全な子が、水生の小動物へと意味的に連合したこと、記号論的にいえば、記号のシニフィエ（signified）面における連合によって、イェルムスレウのいう記号体系では connotative semiotic に相当する現象が発生したこと、そして琉球諸語においてヤドカリを意味するアマンをキーワードに、琉球の国生み神話がオセアニア経由であることを、そのモチーフと言語の両面から考察する。

I. 神話の不完全な子

創世神話のひとつのタイプとして兄妹始祖型神話では、人間でない子が派生概念として登場する。

中国のミャオ、ヤオには、洪水の後、兄妹から最初に肉団（肉塊）が生まれたという神話がある【大林 1991: 249】。台湾のアミの創世神話では、兄妹の男神ララカンと女神ロチエの間で、最初にヘビ、ついでカエルが生まれる【佐山・大西 1923: 10-14】。同じく台湾の別譚（民族名不明）でも、兄神妹神からヘビ、カエルに続き、トカゲ、魚、センザンコウが生まれでる【入江 1920: 3-7】。ただし、タイヤル、サゼク、パイワンには最初の兄妹婚から多数の、人間として完全な子女を得たという神話もある【佐山・大西 1923: 688-690】。

ミクロネシアでは、ヤップの創世神話で、神がみの夫婦であるゴネイとマウドックから四人の正常な子に続き、五人目にはジャコガイが生まれる。洪水によって、それまで陸に住んでいたジャコガイは、海で住みはじめるようになる【秋野 1974: 232-238】。

ただし、物語では、最初から人間でない子が国作りに登場することがある。たとえば、ミクロネシアのナウルでは、クモ、カタツムリから宇宙の起源がはじまる【大林 1993: 137-139】。

インセストの概念は、文化的社会的に規定されているものである。しかし、兄妹始祖とそれに続いて現れる人間でない子というモチーフの組み合わせが、とくにオセアニアと琉球、日本で見出される。

このような人間として不完全な子は、ヒルコ（蛭子）あるいは水生の小生物に置き換えられ、象徴化されたと考えられる。言語でいえば、タブーとなった名称にたいし現れる婉曲表現（euphemism）に相当する現象といえる。ヒルコが、後世、「昼子、日子」（滝沢馬琴説）などと解釈されるのもその類である。

オセアニアでは、シャコガイから世界が創造されるモチーフ（トンプソン A617）、幼虫から人間が生まれるモチーフ（トンプソン A1224.2）が分布するが、前者はタヒティとナウルからの例、後者はトンガ、サモア、トケラウ、ニウエからの例である [KIRTLEY 1971]。

サモアの創世神話 [STEUBEL & HERMAN 1987: 101]

天界からタンガロアが地上をみおろすと、木が天に届きそうである。タンガロアはフエにこの木を切るよう命じる。しかし、重みで枝が地表に垂れてしまう。タンガロアは様子を見るためトゥリを地上に遣わす。地表では繁木の養分がフエによって吸われていた。タンガロアは再度トゥリを遣わしフエを倒す。以後、フエは地上に留まる。やがて死んだフエの死体からウジムシ (ilo) が現れる。タンガロアはンガイオという精霊を遣わし、このウジムシから人間を作らせた。

タヒティの創世神話 [HENRY 1928: 336-338]

神がみの始祖タアロアは、卵形の貝 (pa'a ただし、殻、皮の意味もある) のなかにひとりである。ある日、タアロアは貝を割ってでてそれを天としてルミアと名づけ、また、あらたな貝をとって地とした。タアロアは地を夫とし、岩を妻とした。

(別譚ではタアロアの体の各部分から自然現象が生みだされた。) タアロアが神に乞うて人間が作られたのは、もっと後になってからである。

うえのサモアの神話が示すように、西部ポリネシア（サモア、トンガなど）では、ディクソンによる創造型が主流であり、とくにウジムシから人間が生じるのは、西部に限定される。いっぽう、タヒティの例のように、ポリネシアの南部（マオリ）、東中部（ソシエテ）、北東部（マルケサス）では、ディクソンの系図型（進化型）が多く、原初形態として卵（貝）が登場しそれが割れて天地が生じ、人間は神やその子孫が土をこねることによって作りだされる点で西部とは対照的になる [青柳 1974: 285-286]。

つまり、系図型（進化型）はポリネシアの古層文化に属し、創造型は比較的後世にインドネシア方面からもたらされた [大林 1990: 26, 39] という解釈が成立する。ただし、創造型のうちでも、東南アジアでは、人間がナンキン、ウリ、竹のような植物から生まれるのが普通である [松本 1971: 196-199; 大林 1990: 34]。しかし、つぎのような、人間でない子を、ヒルコをはじめ、ウジムシ、貝、ヤドカリなどの水生の

小動物によって比喩的に置き換える地域的分布に注目すべきである。

II. 島生みの並行性

開闢神話にヤドカリが登場するのは、八重山の特色である [小島 1983: 206] といわれる。

白保にはつぎのような民間伝承がある [八重山 1953: 21-22]。

大昔、日の神がアマン神に天から降り下界の島を作るよう命じた。アマン神は土砂を槍矛でかきまぜ島を作ったあと、アダン林のなかでアーマンチャー、すなわちヤドカリを作った。その後、神は人子種を下し、ヤドカリの穴から二人の男女が生まれた。

この神話について、大林はとくにヤドカリには言及せず、地中の穴からでた男女が結婚する兄妹始祖神話のモチーフは、古層農耕民文化層に属すもので、中国東南海岸部の沿岸文化に起源がある [大林 1976: 3-4, 1991: 127-128] とみる。

なお、水生の動物ではないが、琉球で稲の穂祭りのとき、ニルヤにむけて流されるネズミがある。このネズミは下界に追われた神の生み損ないの子である [伊波 1974: 542] とされ、ネズミは水生ではないものの、ここでは水生の原概念と関連していると考えられる。

つぎに、インセストを媒介とした無秩序から秩序への移行という大林の構造分析に基づき [大林 1975: 28-36]、オセアニア・琉球・日本の神話の構造を対比的に示す。

日本の創世神話（『古事記』）

イザナキ・イザナミの二神が漂う国を治めるため天命によって下界に降り、沼矛をかきまわしてオノコロジマを作り、さらに、みとのまぐわいによって生まれたのはヒルコであった。それで再度、天命を乞い、八つの島を生んだ（図1）。

八重山神話では、イザナキ・イザナミがアマン神に、そしてヒルコがヤドカリに置き換えられていると解釈できる。注意すべきは、現在、八重山神話ではアマン神とヤドカリの意味的關係が途切れてしまっていることである。なお、八重山神話では、その後の具体的な島生みについてなにも語られていない。

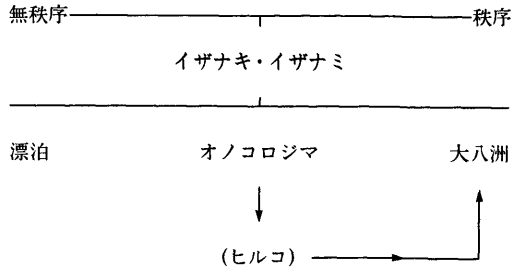


図1 日本の創世神話

これらの神話と類似するモチーフは、ベラウの創世神話に見出される。以下で、ベラウのオオジャコは八重山でヤドカリに取り代る。

ベラウの創世神話

この神話は [宮武 1932: 2-3; 土方 1942: 3-5; PARMENTIER 1987: 130-131, 151-153] で報告されているが、物語の細部で若干、相違がある。

大神ウエル・イアングズ（天の始祖）はなにもない海をみて星を降らせ、アンガウル島 (Ngëaur) とベリリウ島 (Bëliliou) の間のルクス (Lukës) と呼ばれる海域に島を盛り上らせた。(Parmentier [1987] では大神による星の降下は述べられない。) つづいて、オオジャコを下し、このオオジャコから生まれたラトミカイク (Parmentier [1987] ではオオジャコの名がラトミカイクとなる) から人間の始祖となる女神オブアズが生まれ、つづいて女神トゥラン、ウアブが生まれる。

ベラウの神話では、イザナキ・イザナミは超自然的存在として星で、そしてヒルコはオオジャコ (kim 'Tridacna gigas') で表現されている (図2)。

ベラウ諸島は、最初の巨人となって焼き殺された女神ウアブから生みだされる。ベラウ神話において日本神話の大八洲に相当するのは、ウアブの頭からできたバベルダオブ島 (Babëldaob) 北部のングルウロン村 (Ngërëchëlong), 首からのその南のアルレングズ村 (Arrengeđ), "vagina"からの南西部のアイメリク村 (Imëliik), 背からの東海岸、腹からの西海岸、そして、焼けた両足からのバベルダオブ島南西のングムラウル島 (Ngëmëlachë) である。

琉球開闢神話

琉球の国土創造については、『おもろさうし』(巻10の2) で語られる。以下では仲

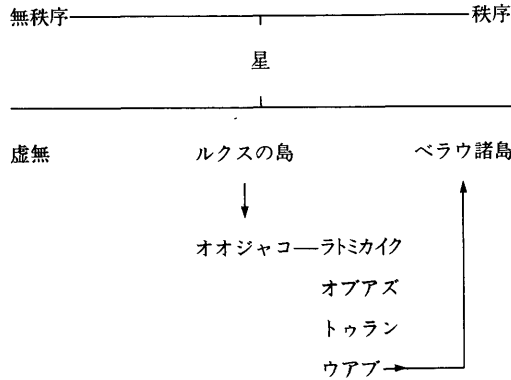


図2 ベラウの創世神話

原訳を摘要する [仲原 1957: 328-334]。

天地のはじめに日神が下界をみおろして、アマミキヨ・シネリキヨに島を作るよう命じた。作られた島じまには、アマミキヨ・シネリキヨの子孫でなく、日神の子である霊力をもつ男女を下した (図3)。

なお、琉球の歴史書『中山世鑑』(1650年)では日神は天帝と表現され、国作りのため下界へ降りたアマミク(阿摩美久)神が島を作ったあと、再度、天に昇って天帝に人子種を乞うたとされる。『古事記』や『おもろさうし』、『中山世鑑』がベラウ神話と異なる点は、島の造成がイザナキ・イザナミやアマミキヨ・シネリキヨによって直接なされたのではなく、再度の天命に従って行われたことである。また、無秩序から

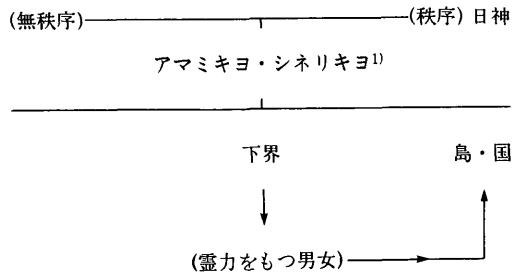


図3 琉球の開闢神話

1) アマミキヨ・シネリキヨが二神であったか一神であったかについては、解釈が分かれる [山下 1974]。

秩序への移行という基本テーマも明瞭には述べられていない。

『おもろさうし』『中山世鑑』の記述は、アマミキヨを国人の始めとする伝説とは矛盾し、アマミキヨのうえに日神（天帝）が重なっているから、これらが成文化したのは封建王国成立後である【仲原 1957: 331】との指摘は妥当であろう。同じく琉球・宮古島の、コイツノ（古意角）神が天意によってコイタマ（姑依玉）女神を得、男神女神を生んだという『宮古島紀事仕次』も、その形式は『中山世鑑』系統である【小島 1983: 202】。

オセアニアでは、ナウルのカタツムリから月が生まれるという類話はあるものの（カタツムリとヤドカリが意味的に相関する点については同族語リストを参照）、ヤドカリが国生みに登場し、いっぽう、琉球・日本では、オオジャコが国生みに登場する神話はこれまでに報告されていない。しかし、オセアニアと琉球・日本をつなぐ線は、人間の創造にあたって現れた不完全な子を、いずれも水生の小動物によって表現している点で共通する。

八重山でオオジャコがヤドカリと取り代ったひとつの理由として、自然環境による制約が考えられよう。熱帯のサンゴ礁に生息するオオジャコは、八重山ではほとんどみられないといわれ、人びとの認識から後退したのである。

Ⅲ. アマンの語源

まず、原オーストロネシア語 **(k)umang* 「ヤドカリ」に由来する、地域的二次形 ***[q]uma (> **umwa)* , ***[q]emang* の同族語リストを掲げる²⁾。

Malay	umang-umang	「ヤドカリ」	[WILKINSON 1932]
Minangkabau	umang-umang	「ヤドカリ」	[THAIB & PAMOENTJAK 1935]
Simalur	umang	「陸ガニ (?)」	[KÄHLER 1961]
Nias	huma	「カタツムリ」	[PPPB, DEPDIKBUD 1985]
Sundanese	umang	「ヤドカリ」	[SATJADIBRATA 1948]

2) Blust は原オーストロネシア語 **qumang* (その二次形は **kumang*) を再構成する。ただし、東部オセアニア諸語のヤドカリ (Tongan 'unga : Samoan unga : Hawaiian unau-na : Fijian unga など) への変化を説明するため **umwa* という二次形を立てる [BLUST 1980: 157]。この音韻変化には **qumang > *umang > *muang > *u-mwa > *u-ngwa* (または **ungma*) $>$ unga が推定される。中核ミクロネシア諸語には **u-mwa* の段階が反映されていることになる。しかし、他の東部オセアニア諸語形を説明するためこのように推定形を必要とすることは、それだけ語源としての信憑性を低める。したがって、それら言語例は同族語リストからあえて省いた。

Iban	umang	「ヤドカリ」	[RICHARDS 1981]
Bare'e	umangi	「ヤドカリ」	[ADRIANI 1928]
Bolaang=Mongondow	umang	「ヤドカリ」	[DUNNEBIER 1951]
Tontemboan	komang	「ヤドカリ」	[SCHWARZ 1908]
Tondano	komang	「カタツムリの種」	[PPPB, DEPDIKBUD 1985]
Sangirese	komang	「ヤドカリ」	[STELLER & AEBERSOLD 1959]
Tausug	umang	「ヤドカリ」	[HASSAN <i>et al.</i> 1975]
Tiruray	kumang	「カニ（総称）」	[SCHLEGEL 1971]
Manobo	key-umang	「カニ（総称）」	[ELKINS 1968]
Cebuano	umang 'Pulmonata'	「有肺類」	[HERMOSISIMA 1966]
Hanunoo	?umang	「カタツムリの種」	[CONKLIN 1953]
Bikol	umang	「ヤドカリ」	[MINTZ & BRITANICO 1985]
Ilokano	umang	「ヤドカリ」	[VANOVERBERGH 1956]
Babuyan	omang	「ヤドカリ」	[TSUCHIDA <i>et al.</i> 1987]
Itbayat	omang	「ヤドカリ」	[TSUCHIDA <i>et al.</i> 1987]
Imorod	omang	「ヤドカリ」	[TSUCHIDA <i>et al.</i> 1987]
Chamorro	umang 'Paguridae'	「ホンヤドカリ科」	[TOPPING <i>et al.</i> 1975]
Tobian	umän	「カニ(非食用, ヤドカリを含む)」 ³⁾	[崎山ノート]
Sonsorolese	uman	「カニ(非食用, ヤドカリを含む)」	[崎山ノート]
Pulo Annian	umaan-na	「ヤドカリ」	[ODA 1977]
Puluwat	wumwo-wum	「ヤドカリ」	[ELBERT 1972]
Trukese	wumwo-wumw	「ヤドカリ」	[GOODENOUGH & SUGITA 1980]
Marshallese	umw	「ヤドカリ」	[ABO <i>et al.</i> 1976]
Carolinian	umwa-l	「ヤドカリ」	[JACKSON & MARCK 1991]
Palauan	?um	「カタツムリの種, ヤドカリ」	[JOSEPHS 1990]
	?ëmang 'Scylla serrata'	「ノコギリガザミ」 ⁴⁾	
Yapese	?umang, ?amang	'Scylla serrata'	[JENSEN 1977]
八重山・西表	amoo	「ヤドカリ」	[宮良 1981]
八重山・白保	aamang	「ヤドカリ」	[宮良 1981]
宮古・多良間	amam	「カニ（総称）」	[崎山ノート]
宮古・大神	amam	「ヤドカリ」	[崎山ノート]

3) 非食用のカニは Tobian では *porumän*, Sonsorolese では *peruman* ともいう。語頭の *por-*, *per-* は「殻」を意味する合成語の要素である。宮古方言のなかで '*Ocypode cordimana*' 「ミナミヌナガニ(非食用)」を表す、琉球方言としてはエ列音をもつ特異な語である *peruma* (多良間) [キタムラ 1972: 261], *perum-kang* (大神, *kang* 「カニ」) などは、これら中核ミクロネシア諸語と対応し、かつて行われた民族移動の痕跡であるとみなしてよい。語形から判断して借用語である可能性も否定できないが、このように、たわいもない生物名が基礎語彙よりも残存することがある。

4) ?um は *kum 'Pagurus sp.'* 「ホンヤドカリ属の一種」 [KRÄMER 1929: 370] と同じである。?um は、Ngchesar 村で副食物のトップとされる [AKIMICHI 1980: 601]。また、?ëmang の学名は [JOHANNES 1981] による。ただし, *gamang* (= ?amang) '*Carcinus sp.*' 「サンゴヤドカリ属の一種」として、ことに美味 [KRÄMER 1929: 369] と報告されているものと ?ëmang とは語源的に同じであろうか。

沖縄・久米	?aman	「ヤドカリ」	[法大 1980]
沖縄・津堅	?amamu	「ヤドカリ」	[琉大 1989]
沖縄・首里	?amang	「ヤドカリ」	[国研 1975]
沖縄・今帰仁	?amaamuu	「ヤドカリ」	[仲宗根 1983]
奄美・沖永良部	?amamu	「ヤドカリ」	[法大 1982]
奄美・喜界	?amamaa	「ヤドカリ」	[法大 1978]
奄美・湯湾	?amamuu	「ヤドカリ」	[法大 1976]
奄美・小港	amam'i	「ヤドカリ」	[宮良 1980]
奄美・古仁屋	amam	「ヤドカリ」	[宮良 1980]
奄美・大和浜	?amang	「ヤドカリ」	[長田・須山・藤井 1977-80]

*(k)umang「ヤドカリ」系同族語リスト

オーストロネシア語史的に解釈すれば、西部ミクロネシアで *(k)umang から姉妹語 (doublets) が発生した。二次的祖語形 **[q]uma は Palauan の ?um(さらに **[q]uma の唇音化した**umwa は Puluwat, Trukese, Marshallese, Carolinian など中核ミクロネシア諸語の一部に残る⁵⁾) へと変化した。

**[q]uma という形は、Palauan を含む東部インドネシア諸語に特徴的な語末 -ng の脱着現象の一環として現れたものである。このような現象は、その結果として、語末の鼻音に不規則的な対応を出現させた。たとえば、東部インドネシア諸語の Sangirese から例をとると、

原オーストロネシア語には存在しない -ng を語尾にもつ例、

*bulu「毛」>bulu-ng

*bunga「花」>bunga-ng

逆に、原オーストロネシア語に存在した -ng を語尾にもたない例、

*pandang「みつめる」>panda

いっぽう、原オーストロネシア語の語末鼻音 (-m, -n) が -ng に変化する例、

*bulan「月」>bula-ng

*kuDen「土製鍋」>kuri-ng

5) 原オーストロネシア語 *bunga>Palauan bung「花」, *depa>mě-reu「尋」(規則的に *p>u), *kima>kim「オオジャコ」, *kita>kid「われわれ(複数包括形)」, *lima>?im「手」, *maCa>mad「目」なども、類似の音韻環境に現れた例である。

土田は、Palauan の ?um を *kumang から直接変化した語、?emang を借用語 (ただし、何語からかは特定せず) とみる (土田私信)。Palauan で baiong「傘」, kaming「ヤギ」, rēng「ウコン」などは、マレー語の借用語 (それぞれ、payung, kambing, lēnga「ゴマ、呪術用植物」から) であることが語形のみならず文化史的にもしられる。しかし、音韻変化から「不規則形」であるといって、主要蛋白源としてマングローブ湿地 (kēburs) に多く生息する ?emang のような生物 [AKIMICHI 1980: 596-597] が借用語であり得るだろうか。

*paNDan「パンダヌス」>ponda-ng

*[zd]alan「道」>dale-ng

*Dalem「内，下」>dalu-ng

*inum「飲む」>inu-ng

などの現象がみられる。ただし、最後の例も、いったん語末音が脱落したあと、再度、-ng を添加させた語末音添加 (paragoge) の結果であると考えられる。したがって、正確に言えば、音韻変化ではない。

Palauan ʔemang~ʔamang (?), Yapese の ʔumang~ʔamang のような不安定な語形は、西部マイクロネシア地域で、*(k)umang から第二末尾音節の弱まった二次形 **[q]emang が発生したことを物語る。土田は Yapese の ʔamang を不規則形だというが、その根拠を示していない [土田 1992: 54]。

言語系統からは Palauan はインドネシア語派、Yapese はメラネシア語派に分類されるが、**[q]emang は、現在のような語派の特徴を帯びて分化する以前のマイクロネシア祖語期の共通語彙に属する [崎山 1980]。

琉球諸語には、この**[q]emang に由来する形が保持され、琉球祖語形として、**[q]amang が立てられる。

琉球諸語の amang(aman), amamu, amami などから明らかなように、語尾の対応が不規則である。しかし、音韻変化からは首里の amang が amami に由来する⁶⁾ とみることではできないのみならず、amamu を本来の形とみなすのも根拠あつてのことではない [土田 1992: 54]⁷⁾ から議論にならない。

筆者は、amam のような不規則形が現れた原因として、**[ʔ]amang に語末母音 (supporting vowel) が添加された結果、-ng の後に母音をともなう音韻環境を許容しない琉球諸語では、-ng が -m に変化した(金田一京助の「音韻相通の16」)と考える。しかし、語末母音要素の文法的機能については、amamaa の -aa が琉球諸語に多く見出される愛称辞の可能性があるほか⁸⁾、語末の -u, -i の起源は不明である。結果として、amam という単独形は、母音を伴った amam 形を異分析した結果、発生した。また、西表の amoo のような形は、東部インドネシア諸語の脱着現象とも関連する可

6) 琉球諸語 -mi が首里 -ng と対応するのは例外的である。その反例、
「耳」 首里 mimi: 喜界 mimi: 津堅 mimi
「海」 " ʔumi: " ʔumi: " ʔmimi
「波」 " nami: " nami: " nami

7) および、土田私信による。

8) amami に -aa が付いたのではない。そうならば、魚名のカワハギが首里で kawahagyaあとなるように、*amamyaa となるはずである。

能性がある。

宮良説では、アマンを大和言葉によりアマムシ「海虫」の義と解釈する。しかし、*amamuu*, *amam'i*などの語尾の *-muu*, *-m'i* を *-musi* によって説明することは、音韻変化的に牽強附会する以外、不可能である。宮良説でアーマン・ニューを「海人世」(『おもろさうし』でアマミヤ)とみなすのも、同様の当て推量である。しかし、この説は、宮良(泰)などでも援用されている[宮良(泰) 1979: 52]。

おわりに

すでに述べたように、現在、琉球諸語のヤドカリを表す語と、神話上の名称であるアマミキヨ、アマミヤとの間には、共時的に意味的連関は存在しない。

琉球神話の神アマミク(『おもろさうし』でアマミキヨ)は、現在、首里でアマンチュー(?amaNQcu)と発音される。そのため、八重山においてアマンチューをアーマンチャー(たとえば、新城で *aman-tsa*)、すなわちヤドカリとみなすような民間語源説が現れたという[八重山 1953: 23]。しかし、実際はこの説明の逆であろう。琉球諸語のアマン(アーマン)にこそ、ヤドカリの原意が留められていると考えられる。地名のアマミ(奄美)の語源についても、海部(海人部)、海見、海水、天廻などに求める諸説があり、決着をみていない。しかし、ヤドカリとの関係については、これまでに論じられたことがない。

なお、伊波は、アマミとアマミキヨという名称から、日本建国以前に、琉球人の祖先となった海部族が九州から奄美を経て南下したと主張した[伊波 1974: 579-587]。この見解は、それ以降の琉球(沖縄)研究に、宮良語源説もその例であるように、結果として一種の方向づけをすることになったことはいなめない。

本論で述べたように地表の小さな生物ヤドカリへの比喻は、琉球では、古来、アマミヤが天井に存するとは観ぜられず、国土と同一の平面上にあると信じられていたが、道教の広通によって天の思想へと発達した[伊波 1974: 583-584]という指摘への理由を説明する。また、琉球で昔の世を意味してヤドカリ世といわれてきたが、なぜヤドカリがアマンと呼ばれるのかが問題である[小島 1983: 206-207]とも問われている。その答えも本論で与えたことになる。

大林は、東南アジア、ポリネシアと共通する創世神話の、日本における起源を弥生時代とみる[大林 1990: 222-226]。神話のモチーフそれ自体は日本列島にまでおよんだものの、その後、キーワードとなったアマンという言葉が琉球列島にしか見出せな

いのは、この言葉の渡来が古墳時代以降であったからである。日本語形成に関与したオーストロネシア語族の時期区分によれば【崎山 1990】、アマンは、古墳期以降の、オーストロネシア第三期に属する語彙項目のなかに含まれる。

付 記

本論は、筆者が日本民族学会第21回研究大会（1982年5月15日沖縄県労働福祉会館）において発表した「琉球の生物名におけるオーストロネシア語の痕跡」【プログラム研究発表抄録，pp.33-34】にたいする土田 滋教授（東京大学文学部）の批判的内容の研究発表【土田 1992】と、それをめぐる筆者とのディスカッションがなかったら、生まれなかったであろう。はからずも旧説をブラッシュアップする機会をもつことができた点で、土田教授にまず感謝したい。また、草稿に目を通した須藤健一教授（神戸大学国際文化学部）と田村克己助教授（国立民族学博物館）は、それぞれ専門の立場から懇切なコメントをされた。多忙であった両教授にあつくお礼を申したい。

文 献

- （辞書：語彙集については省略。カッコは初出年）
- AKIMICHI, T.
1980 A Note on Palauan Food Categories: *Odóim* versus *Ongráol*.『国立民族学博物館研究報告』5 (2): 593-610.
- 秋野癸巨矢
1974 『ミクロネシアの民話』太平出版社。
- 青柳真智子
1974 「ポリネシアの創世神話について」大林太良編『日本神話の比較研究』法政大学出版局, pp. 268-306.
- BENEDICT, P.K.
1990 *Japanese/Austro-Tai*. Ann Arbor: Karoma Publishers, Inc.
- BLUST, R.
1980 Austronesian Etymologies. *Oceanic Linguistics* 19 (1-2): 1-181.
- HENRY, T.
1928 *Ancient Tahiti*. Honolulu: The Museum.
- 土方久功
1942 『バラオの神話伝説』大和書房。
- 伊波普猷
1974 (1939) 「日本文化の南漸」『伊波普猷全集5』平凡社, pp. 295-602.
- 入江暁風
1920 『神話台湾生蕃人物語』（私家版）。
- JOHANNES, R.E.
1981 *Words of the Lagoon: Fishing and Marine Lore in the Palau District of Micronesia*. Berkeley: University of California Press.
- KIRTLEY, B.F.
1971 *A Motif-Index of Traditional Polynesian Narratives*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- キタムラ, S.H.

- 1972 (1960) 「宮古方言音韻論の一考察」 外間守善編『沖縄文化論叢 5 言語編』平凡社。
- 小島櫻禮
1983 (1977) 「琉球の開闢神話の物語形式」『琉球学の視角』柏書房。
- KRÄMER, A.
1929 *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910. Palau 4. Teilband.* Hamburg: Friederichsen, de Gruyter & Co.
- 松本信広
1971 (1931) 『日本神話の研究』平凡社。
- 宮武正道
1932 『パラオ島の伝説と民謡』東洋民俗博物館。
- 宮良泰平
1979 『続・八重山方言の素姓』宮良作 (私家版)。
- 宮良当壮
1980, 1981 (1930) 『八重山語彙甲・乙篇』(宮良当壮全集 8) 第一書房。
- 仲原善忠
1957 『おもろ新釈』琉球文教図書。
- 大林太良
1975 『日本神話の構造』弘文堂。
1976 「琉球神話と日本神話——天降る始祖・海幸山幸」『月刊言語』5 (1): 2-9。
1990 (1961) 『日本神話の起源』徳間書店。
1991 『神話の系譜』講談社。
1993 『海の神話』講談社。
- PARMENTIER, R.J.
1987 *The Sacred Remains, Myth, History, and Policy in Belau.* Chicago & London: The University of Chicago Press.
- 崎山 理
1980 「ミクロネシア祖語の性質」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』1(3): 146-156。
1990 「日本語形成におけるオーストロネシア語族の要素」『東アジアの古代文化』65: 61-75。
- 佐山融吉・大西吉寿
1923 『生蕃伝説集』杉田重蔵書店。
- STEUBEL, C. & Bro. HERMAN
1987 *Tala o le Vavau—The Myths, Legends and Customs of Old Samoa.* Auckland: Polynesian Press.
- 土田 滋
1992 「<分科会研究発表要旨> III 沖縄に固有の単語とオーストロネシア諸語」『復帰20周年記念国際シンポジウム・沖縄文化の源流を探る——環太平洋の中の沖縄』沖縄県立芸大付属研究所内国際シンポジウム事務局, p. 54。
- 八重山歴史編集委員会
1953 『八重山歴史』八重山地区教育長事務所内歴史編集委員会。
- 山下欣一
1974 「琉球神話についての若干の問題」大林太良編『日本神話の比較研究』法政大学出版局, pp. 33-68。